知、而及清國開釁、王師所向、無不摧挫、旭旗所翻、如崩厥角、轉瞬之間、皇威輝四海、電閃之頃、雄武震八紘、不獨使清虜屏息、宇內各邦莫不聞風而仰望敬憚、蓋戰沒諸士與有力焉、嗚呼諸士玉碎其身、其名萬世不朽、聖明酬之厚、同胞敬之深、可謂死有餘榮矣、今也王師如破竹、一軍西征、已入清地、連陷諸城、將衝奉天、一軍南征、已屯金州、將略旅順進襲北京、其攻陷兩都、爲城下之盟、必不在遠、諸士亦可以瞑矣、旅途倉皇、供祭無物、敢草鄙文、以充薄奠、尙饗、

莊重中有勇躍之氣、使人一讀十起、

遠湖周平評閱

吊故山本固一郎君文

杉山富槌

維時明治甲午冬十一月。我第五高等學校職員生徒。同爲肥筑修學旅行。迂路過吾亡友山本固一郎君之墓。而吊其靈。夫生死者。命也。不能如之何矣。雖然。知友而去世。誰有不痛惜者哉。悲夫。『全天命而死者。老病而死者。尙且悲之痛之。而不能禁。況抱有爲之才。而夭折者。況又抱有爲之才。保健康之軀。而死於不測之禍者乎。君夙抱有爲之才。保健康之軀。來學我校。孳々而勉。人皆屬望焉。而一朝陷於不測之災而亡矣。悲夫。』回顧君之逝。在于去年。爾來僅閱二十月。今也。我邦與清國結兵。而連戰連勝。一國之武威。漸顯于宇內。歐米諸邦。稱我以爲東洋之一大强國。豈不快哉。時勢既如此。將來之多事。可推而知。是誠英傑俊秀

蹶起盡瘁之時也。而君今也則亡焉。悲夫。』我等跋渉肥筑之山河。茲十有餘日。共苦樂。仝寢食。或探舊跡。或尋名勝。或觀察人情風俗。以鍛筋骨。練心膽。而獨不與君仝此行。痛恨何已。』今聊行捧銃之禮於墓前。以表平生纏綿之情。靈而有知。尚來饗。

節々轉換。極見筆力。末段叙經歷之處。語帶風雲。而哀惜之情。自躍出於其中。亦是佳作

冬十二月　　含紫樓主人　批

曉發

不老庵主人

さきつ日の行軍に、朝ぬ〳〵ありあけの月影いと冴えたるに、列を整へて、喇叭の聲勇ましく立ちいづれば、見渡す限り、野も山も霜いと白うおきて、面を拂ふ朔風の寒さ、銃把る指も凍りて赤くなり、つく息も氷るかと覺えて、いとたへがたけなる程に、夜も白ら〳〵とあけわたり、朝日いとうらゝけく立のぼれば、身もやう〳〵のぞかにありぬ。こゝらの氣候のいとおだしきにも、かばかりの苦はあるものをまいて遠く唐土のはらに、軍せるつはもの共の勞やいかならん。彼地はこゝにも聞及ばぬ、寒氣の強き所なりときけり。飢を忍びつゝ夜をこめては闇路をたどる折もあらん。あるは、路なき所をふみまよひては、澤に陷る時もあらん。あるはみ山の木の下岩が根よ宿りては、虎れはかみの聲にも、夢驚かさるゝこともありなん。日の本のますらをは、